

## 下部内視鏡検査前処置での看護師のかかわりを考える ～下剤内服の聞き取り調査を通して～

5階東病棟 ○権藤 朱美 高橋 仁美 井手 奈都美 川上 結衣 蓑原 樹理  
高橋リカ 満永亜由美

### 【目的】

当病棟入院中に実施された下部内視鏡検査は昨年1年間で204名、その内70歳以上の患者は119名であった。70歳以上が半数以上を占める中使用する下剤の変更もあり、新規に導入された下剤の使用では添付された用紙を用いて説明を行っていた。そのような中「高齢者は下剤内服の直前に説明をうけても緊張感、不安があり服用方法が理解しづらい」との患者からの意見があった。当病棟では下部内視鏡検査前処置は、検査当日の朝7時頃より繁雑な病棟業務の時間帯の中で行われており対象者が複数名重なる事もある。そこで、前処置に対する患者の理解度や不安について実態調査を行い、その結果をもとに前処置への関わりを見直すことで、より安全で確実な前処置が実施できることを目的とする。

### 【方法】

期間：2016年9月20日～11月20日

対象：大腸内視鏡検査（EMR・CS）対象者：20例

方法：検査当日の前処置（下剤内服）における聞き取り調査

### 【結果】

実施した聞き取り調査から、検査当日の前処置下剤の服用方法の説明についてほとんどの人から理解できたとの回答が得られたが、一部の人からは理解が出来なかったという回答があった。

今回の対象者は全員予定通り内視鏡検査を受けることができた。

### 【考察】

山口は、「大腸内視鏡検査は必要不可欠な検査であることは言うまでもない。しかし、内視鏡検査の前処置が不十分である場合には腸管内に糞便が残留し、検査にかかる時間や診断・治療技術に悪影響を及ぼす事となり、病変の見落としや偶発症を誘発する原因にもなりうる」とのべている。このことから、大腸内視鏡検査の前処置は、患者が安全に大腸内視鏡検査を受けるためには非常に重要なものであることが分かる。実施した聞き取り調査の結果から、前処置の内服について理解を得られてない結果が一部得られた。また、その結果は後期高齢者に限らずといった結果であった。

日本看護協会は「患者が理解できる説明を行う事は医療者の義務であるが、特に高齢者に対しては、理解能力を問う以前に、説明する側の説明能力を高め、分かりやすい説明を心がけることが重要となる」と述べている。これらのことから今後は説明する看護師からも調査を行い、説明に関わるスタッフ教育の検討が必要と考える。